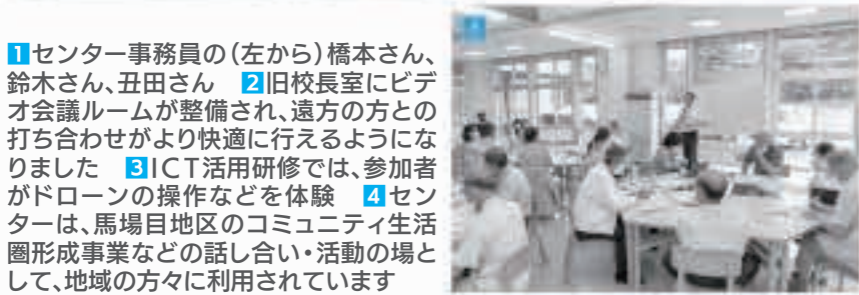


BABAME BASEから 地域へ新たな活力を



町地域活性化支援センターは、平成12年(2000年)に、旧馬場目小学校校舎として完成。地元産の木材をふんだんに使った木造2階建ての建物には現在、様々な専門性を持った18の個人・団体が入居しています。



1センター事務員の(左から)橋本さん、鈴木さん、丑田さん 2旧校長室にビデオ会議ルームが整備され、遠方の方との打ち合わせがより快適に行えるようになりました 3ICT活用研修では、参加者がドローンの操作などを体験 4センターは、馬場目地区のコミュニティ生活圏形成事業などの話し合い・活動の場として、地域の方々に利用されています

五城目と世界をつなぐ入り口に

センターが立ち上がった平成25年10月。地域に根ざした事業を支援するための田舎の廃校は、世間からすれば無謀でした。少子高齢化、人口減少が進み、交通の便も良くない立地では、誰も来ないと思ったはず。それから6年が経ち、のべ30社が入居しました。多種多様な業種で、町出身者から県外の方まで、素敵な方々が入居しました。

ここまで集まったのは、決して賃料が安いからではありません。すべてのきっかけは“ご縁”。そして、五城目を見て「不思議な魅力のある町」だと気に入ったみなさまが入居してきました。

センターは五城目の出島、世界と繋がる入り口です。町を変えていく新たな風を、ビジネス、学問、アートによって吹かせていきたいと願っています。そして、ますます不思議な魅力を町で育んでいきましょう。世界で一番こどもが育つ町へ、これからもぜひ一緒に。

町地域活性化支援センター館長
柳澤 龍さん(33歳・雀館)



平成25年10月に開設し、本年で7年目を迎える町地域活性化支援センター(愛称: BABAME BASE)。本年2月から7月にかけて、新たに11個人・団体からの入居があるなど、同センターを拠点として、地域の新たな活力が生み出されようとしています。

経験豊富な4人が センター全般の運営を担当

町地域活性化支援センターは、平成25年3月に閉校した旧馬場目小学校を活用し、起業や町のコミュニティ活動を支援する場として同年10月に町が開設。昨年4月からは、一般社団法人ドチャベンジャーズ(注1)が指定管理者として、施設を運営しています。

センターの事務を行うスタッフは、柳澤龍さん、丑田香澄さん、鈴木矩彦さん、橋本洋美さんの4人。柳澤さんと丑田さんは、平成26年から3年間で、町の地域おこし協力隊として起業支援・移住定住支援・6次産業化支援などに取り組み、鈴木さんは、その2人との関わりもあって、町の特産品のイチゴを使ったビールを販売する会社を立ち上げ、平成28年9月から約1年半の間、センターに入居していました。県外でITインストラクターや研修講師などを務めていた橋本さんは、センターでのイベントに参加したことを通じ、

遠方にいる方との会議、移動が制限された際の打ち合わせ等をよりスムーズに行えるようになりました。

また、7月16日には、センターの入居企業でドローン(無人航空機)講習などを行うスリーアイボード社の主催で「体験型実習ICT活用研修」がセンターを会場に実施。この研修は、工事の過程にICT(情報通信技術)を導入し、建設現場の生産性を高める「i-construction」の取り組みを推進しようというもので、町内外の施工業者などの参加がありました。

町の様々な人とのご縁が生まれ、3年前に本町へ移住。

そういった経験を基に、柳澤さんは館長として入居者の誘致、丑田さんはFacebookなどを使った情報発信、鈴木さんは経理、橋本さんはデータの集計など、それぞれが持つ強みを生かしながら、センターの運営にあたっています。

多様な専門性を持つ入居者が 新たな取り組みを推進

本年7月現在、センターに入居している企業・個人は合わせて18。広告代理店や観光事業の企画運営を行う企業、美容院、大学の研究者など、多様な専門性を持った方々が入居し、入居者同士の交流や意見交換などが活発に行われ、新たな取り組みが推進されています。

本年5月には、入居者からの要望もあり、新たな働き方のスタイルに対応した「ビデオ会議ルーム」を旧校長室に整備。これにより、

地域づくり活動の拠点として 地区住民の方々が利用

センターでは、地域との連携強化のため、昨年度に、町民の方々が委員を務めるセンターの運営協議会を設立・開催。その中で、町民が気軽に足を運べるきっかけを作り、町全体へ活力を与える場としての役割を担っていくことを期待する声などがありました。

現在は、主に馬場目地区のコミュニティ生活圏形成事業の活動拠点として地域の方々への利用を促進し、各種活動がセンターを拠点に進められています。